

結合価文法から見たもう一つの必須成分

趙順文

1. 結合価文法縁起

結合価文法は文の構造を名詞句と述語との共起関係で捉える文法のことである。もともとこの文法テニエルの依存文法の結合価の考え方（注1）に源を発したものが、その後多くの研究者に受け継がれ、めめざしい発展をとげて、今日に至っている。文構造の中心を述語特に動詞に求める点では格文法と親近関係を持っているけれども、独自の意味特徴の記述体系（注2）は後者と大いに趣きを異にする。おおざっぱに言えば、深層構造で捉える各々の名詞句の「動作主」「相手」「対象」などの抽象的意味を、表層構造において、さらに具体的に分類しようとするのがこの文法の特徴と言えよう。

この理論を駆使して日本語研究に適用した有名な研究者の一人として石綿敏雄氏があげられよう。氏が荻野孝野との共同研究で実際の調査データに基づいて作った日本語用言結合価表（注3）は周知の如く、日本語研究に欠かせない貴重な参考資料に価する。ただ、この結合価表について氏は、用言の数、調査対象としてデータなどの偏りもあるので、汎用とは言い難いが、結合価表の一例として参考にしていたきたいと念を押して前置したが、実践的且つ包括的な参考資料としてはいささかその価値が減じないと信じる。

本稿の目的は主として結合価表の動詞に必要と思われる格を批判したのち、この表から得たヒントに基いて、「意図動詞」という述語実現を分析して、今までの研

究ではとかく看過されてしまったもう一つの必須成分「第5形引用文」を考察するところにある。考察するに当たり、まず必須成分とその周辺問題を述べよう。

2. 必須成分とは何か

結合価文法では文構造の中心を述語特に動詞を求めると前述した。言い換えれば、動詞の語彙性格いかんによって、文構造のタイプが左右される。かくて、動詞にとって必須成分とは何かという素朴な問題提起がどうしても必要である。もちろん、結合価文法に限らず、どの語学の研究でも、これは避けて通れないものと考えてもよからう。現に一つの述語が成立するのに必要な条件は何かという論究が多くなされていることはこの事実を裏付けてくれた。術語の相違こそあれ、内容そのものは大差はないと思われる。例えば、寺村秀夫氏は状況についての知識による助けということが全くない条件の下で、あるコトの表現において、言い換えればある述語にとって、それがなければそのコトの描写が不完全であると感じられるものを「必須補語」と定義した。石綿敏雄氏は述語の結合価に欠かせないものを「必須成分」と名付けた。同じ立場に立つ仁田義雄氏は「必須成分」の代わりに「格成分」を用い、さらにこの考え方の流れを受け継いで発展させた益岡隆志氏は、この「格成分」を「項」とし、これと「副詞的補足語」を組み合わせたものを「補足成分」と命名した。一方、「必須補語」なり「格成分」なりという用語を使わないにしても、ヴントの内的限定格という用語に従って、主格・対格・与格を関係の自閉的な一世界を構成するとしている川端善明氏もいる。そして、必須成分の格の具体化として、細かい所まで検討する必要があるにせよ、各家に共通するものは「ガ」「ニ」「ヲ」という三つの形と言い得る。つまり、ある述語特に動詞にとって必須成分はこれらの「ガ」「ニ」「ヲ」格と名詞が組み合わさったものと認めてもいい。ただ、本稿では、三つの格の形だけにこだわらず、寺村氏の定義に則った「必須補語」ないし「準必須補語」も、動詞にとっての必須成分という意味で使われている。

実際、寺村氏の「ナル」類と「変エル」類の「準必須補語」を要する動詞と、石綿・荻野両氏の結合価表のをつきあわせると、両者の間に多少の「ずれ」があるのに気付いた。例えば「分カレル」「マトマル」「上ガル」「落ちル」「決マル」「上ゲル」「下ゲル」「マトメル」「塗ル」などの「準必須補語」の「ニ」格記述は、両氏の結合価表において詳細になされているが、これに反して、「伸ビル」「チヂム」「増エル」「カタマル」「発展スル」「増ヤス」「減ラス」「チヂメル」「アタタメル」「熱マル」「割ル」「裂ク」の「ニ」格記述は両氏の結合価表から抜けている。こうしたことは、必須・随意の区別をやめて、現象的に動詞の述語実現においてどんな成分が持たれるかを記述すればいいという考え方（注4）にもつながっている。しかし、意味論的に、ある「動詞」たとえば「勉強する」にとっての必須成分は「人間」「抽象概念」の二つの名詞と「ガ」格・「ヲ」格の二つの動詞が組み合わさったものと考えても、研究上有効的であろう。次の図はXバー理論によるものである。（注5）

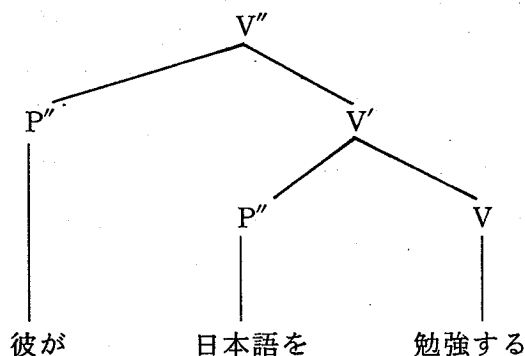


図 1

寺村氏の例文だけでも、例えば「党ガ二ツニワカレル」「茶碗ガ二ツニ割レタ」「茶碗ガメチャクチャニ割レタ」はそれぞれ次の図のようになる。

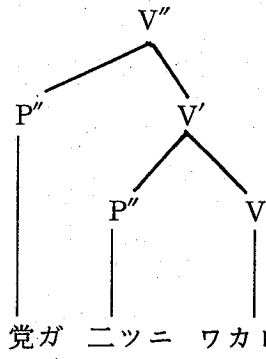


図 2

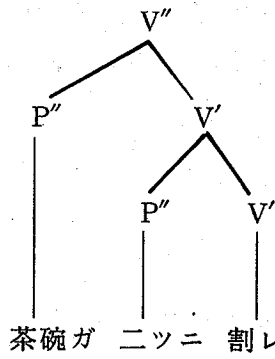


図 3

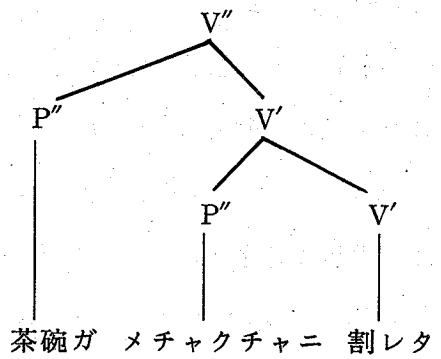


図 4

そして、「校長先生ハ、新シク転任シテキタ若イ女ノ先生ヲ生徒ニ紹介シタ」は次の如くである。

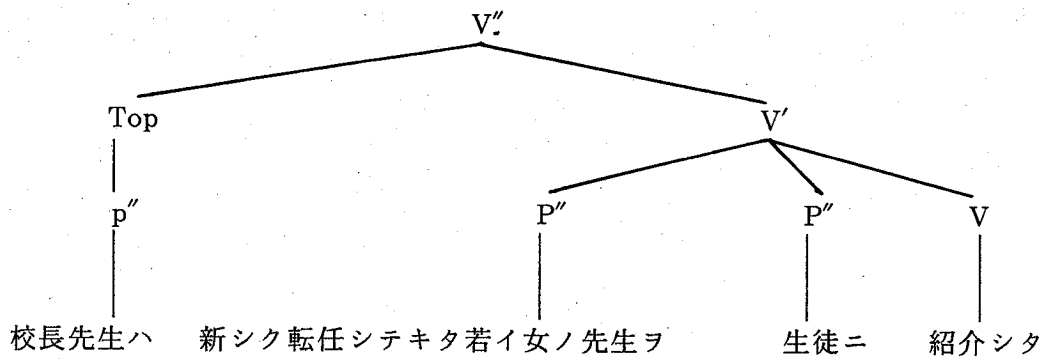


図 5

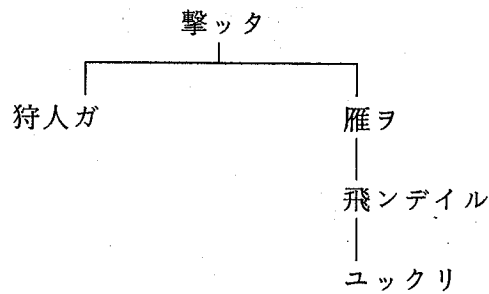


図 6

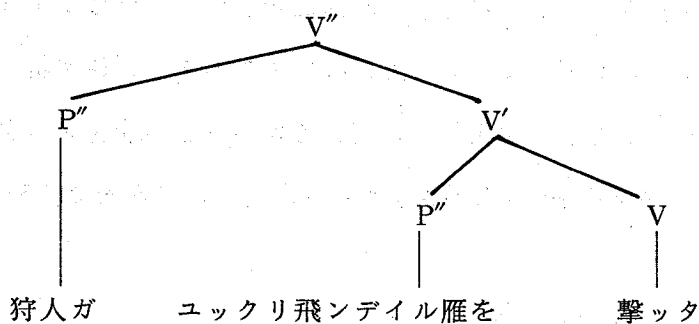


図 7

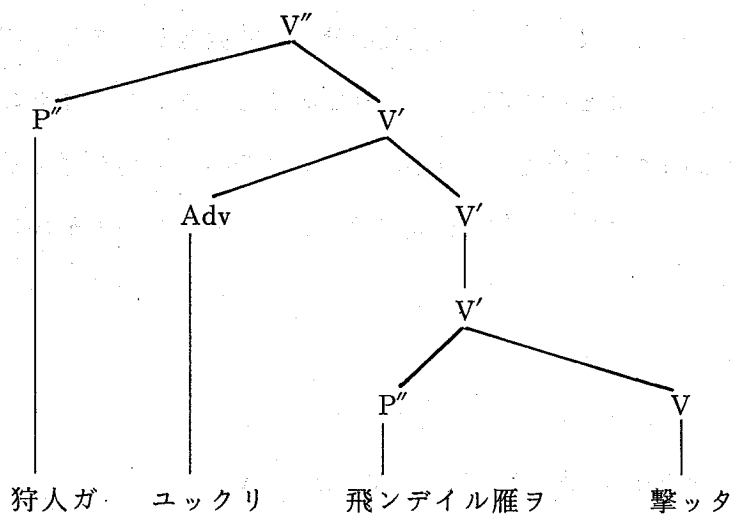


図 8

最後、参照のために、「狩人ガユックリ飛ンデイル雁ヲ撃ッタ」の例文に対する仁田氏の依存関係図（注6）と筆者のを対照してみよう。

かくて、Xバー理論による表記法は実際、「必須成分」の相互間の強弱関係をハイラキー関係によつて的確に示すばかりでなく、顕在化している直線的性質ないし修飾関係もはっきり表し得ると思う。

3. 必須成分の問題点

上述した益岡氏の「補足成分」のうち「副詞的補足語」を詳しく観察すると、一つ

の問題点に気付いた。つまり、氏は「副詞的補足語」の下位分類として「連用語」と「引用語」を立てるとしている。立て方自身はさておき、「連用語」には異論をはさむ余地はないけれども、「引用語」に関してはいささか検討する必要があるのではないかと思う。まず氏の挙例を参考されたい。「○」という記号は以下研究者の挙例を示す。

○当時大学のことを象牙の塔といったが……。

○彼は、中国の儒教を、いつわりの道と考え……。

つまり、名詞と助詞「ト」が組み合わさったものを「引用語」（注8）と命名したのを受けて、氏はこれらの文にあっては補足成分として機能しており、述語「いった」と「考える」（注9）にとって不可欠の成分であると指摘した。従来の研究では充分に扱われてこなかった「引用語」の考察においてはこの点を高く評価してもいいが、石綿、荻野両氏の日本語用言の結合価表では決してこの点をおろそかにするのではないということに注目されたい。例えば「言う」と「考える」の結合価は次のように記述している。

○言う N〔hum〕が+N〔abs〕を+N〔hum〕に+V

 N〔hum〕が+N〔hum〕に+Sと+V

○考える N〔hum〕が+Sと+V

 N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

注意すべきは、すでに前述したが、この表は用言の数、調査対象としたデータ等の偏りもあるので、汎用的とはいえないと両氏が言った点である。しかし、記述分類にあたっては、必須成分と思われる「言う」の「引用文」、「考える」の「引用文」と「引用語」はきちんと述べてある。「言う」に即しては「引用語」が欠落しているように見えるが、これはデータ等の不備によるものと考えられる。実際「言う」とほぼ同じ意味に使われる次の「言明する」の結合価を見ても、おのずから納得できる。

○言明する N〔hum〕が+N〔abs〕を+N〔abs〕と+V

○称する N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

また、「考える」の結合価とほとんど同じ「判断する」の例も非常に参考になる。

○判断する N〔hum〕が+N〔abs〕を+V

N〔hum〕が+Sと+V

N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

これらの動詞ばかりでなく、「思う」「感じる」「見える」「見なる」「見る」「きめる」「認める」「呼ぶ」などの認識動詞ないし命名動詞は、必須成分と感じられるものである「引用語」をほぼ揃えること（注7）に注目されたい。

○思う N〔hum〕が+N〔div〕を+V

N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

○感じる N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

○見える N〔con〕が+N〔hum〕に+V

N〔con〕が+N〔loc〕に+V

N〔con〕が+N〔con〕に+N〔hum〕に+V

N〔con〕が+N〔con〕と+N〔hum〕に+V

○見なす N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

○見る N〔hum〕が+N〔abs〕と+V

N〔hum〕が+N〔con〕を+V

N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

○きめる N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕に+V

N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

○認める N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

○呼ぶ N〔hum〕が+N〔hum〕を+V

N〔hum〕が+N〔hum〕を+N〔abs〕と+V

N〔hum〕が+N〔hum〕を+N〔hum〕と+V

一方、この結合価表には問題点が全くないというわけでもない。ここで「ニ」格に焦点を絞って、問題提起の一つとする。「ニ」は動作主自身が移動した結果存在

する場所が、動作主の動作を受ける対象物の存在場所を表すのが本義であろう。
(注10) もちろん、「縛る」「結ぶ」「揃える」「抱く」「持つ」などの動詞に限って、奥田靖雄氏の言う通りこのような接触のための道具を示す場合は「デ」の代わりに「ニ」を使い得るし、また「濡れる」「震える」などの動詞が、現象の意味を表す「ニ」格名詞と組み合わせると、原因的な意味を獲得しうる。ここでは深く意味の論究ないし名詞の意味特徴の確立に立ち入る余格はないので、現象的に「ニ」格が体う動詞の記述を示すだけに止める。以下、順を追って、両氏の結合価表の動詞と文型を、筆者のあげた実例と比較対照してみることによって、この表の補うべき所の一端を捉え得るだろう。なお、番号は両氏の表によるものとする。

6 あえぐ N〔hum〕が+V

①重荷にあえぎながら、山の頂上にたどり着いたときの満足感が登山のだいご味だ。(国・4)

②四十六年度といえば、……いわゆる円切り不況にあえいだ一年間だった。
(学研・4)

45 余る N〔div〕+V

①大きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。(芥川龍之介・杜子春)

②あの人は八十に余る高齢なのに、七十歳代にしか見えない。(動・29)

46 表す N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①今年の夏休みには、朝・昼・晩の三回、温度を計ってグラフに表し、結果をまとめてみよう。(国・34)

②うちの祖父は、喜怒哀楽の感情をめったに顔に表しません。(国・35)

69 生きる N〔hum〕が+V

①社会に生きるわたしたち人間はいつもの世にも、その時代とともに生きてきた。(国・48)

②サード前のゆいあたりがかえって幸運で、なんとか一塁に生きることが出来る。(国・58)

75 急ぐ N〔hum〕が+N〔act〕を+V

①彼女はデートに急いだ。(フ・68)

②彼は学校へ急いだ。(講・63)

92 要る N〔hum〕が+V

①その旅行にどれだけ金がかかるのか。(プ・136)

②食事を、飢えるしのぐだけのものにしないためには、料理にもいろいろと物
夫がかかるものです。(国・69)

118 うながす N〔hum〕が+N〔act〕を+V

①彼は父に、早く行こうと促した。(ア・54)

②特にこの点を忘れしやすいので、諸君には注意を促しておく(国・85)

120 生まれる N〔hum〕が+V

N〔con〕が+V

①ああ、男に生まれて損した、女に生まれてりゃよかった。(国・89)

②学内に新しい委員会が生まれた。(プ・173)

222 輝く N〔con〕が+V

①結婚式の日、花嫁の顔は、あふれる喜びに輝いてしまいました。(国・140)

②夜空に星がちからか輝いていた。(高・127)

229 固める N〔hum〕が+N〔loc〕を+V

①皆それぞれ、得物に身を固めて……(芥川龍之介・偷盗)

②荷物は部屋のすみに固めて置いておきました。(国・159)

264 かなう N〔hum〕が+V

①厳しい母の眼鏡にかなうようなお嫁さんはそうないでしょう。(国・164)

②私は商業学校の時から剣道も二段で主将をしていたが、軍隊でおぼえたこ
の人の剣にはかなわなかった。(小島信夫・小鏡)

272 かまう N〔hum〕が+N〔hum〕を+V

①急ぐなら、わたしに構わないで先に行ってちょうだい。(国・167)

②「今から見ればあまり早婚だけれども、其は昔様なことには些しも構わなかった。」（山田美妙・武蔵野）

290 感じる N〔hum〕が+N〔div〕を+N〔div〕と+V

①新しい仕事を始めるという友人の意気に感じて、わたしも一役買うことにした。（国・181）

②彼の熱弁にも聴衆はなにも感じなかった。（プ・378）

299 聞こえる N〔con〕が+V

①彼はうでのいい大工として世に聞こえていた。（例・208）

②うぬぼれに聞こえるかもしれないが、それは私にしかできないと思う。（フ・235）

301 きざむ N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①山の木に名前を刻む登山者が多くなってきた。（フ・236）

②妻の額にはもの匿すことの出来ない、苦渋を現す皺が深く刻まれていた。（中村真一郎・天使の生活）

327 着る N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①ちょっと寒いようだから、シャツの上にセーターを着ていこう。（国・212）

②あの男は、権力をかさに着て、弱い者いじめをしている。（国・212）

353 暮れる N〔temp〕が+V

①漁の一日は雨に暮れたが。（三島由紀夫・潮騒）

②彼は口に出してくどいて、いつまでも一人涙に暮れていた。（野上弥生子・海神丸）

413 叫ぶ N〔hum〕が+V

①マラソンのレースを間近に見て、ぼくはすごいなあと、心に叫んだ。（国・296）

448 失敗する N〔act〕が+V

①伯父さんが事業に失敗したので……（山本有三・波）

② ブラジルでの事業に失敗し、男は多くの借金を抱えて帰国した。(国・328)

455 忍ぶ N〔hum〕が+N〔abs〕を+V

①わたしは物陰に忍んで、彼の帰りをじっと待っていた。(国・330)

②谷あいの村を囲むあらゆる林と草原に、息をひそめて忍ぶ外国兵がみちあふれ……(大江健三郎・飼育)

456 しばる N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①下著とかいて紐に縛ったボール箱から……(幸田文・流れる)

492 しるす N〔hum〕が+N〔abs〕+V

①偉大な業績を残した彼の名は、永久に歴史の上に記されることだろう。
(国・357)

②私は、日陰者としての第一歩を、路上に記したわけである。(獅子文六・てんやわんや)

507 透かす N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①洞くつに入ってきた人の顔を、外の明るい光に透かし見ると、死んだと思っていた船長だった。(国・371)

②お酒の入った茶色のびんを明かりに透かして、残りの量を見た。(国・371)

518 進める N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①ここでは、単に文学論にとどまらず、作者の人生観にまで論が進められる。
(国・379)

②四代の奥方に仕え、表使格に進められ、隠居して終身二人扶持をもらうことになった。(森鷗外・じいさんばあさん)

252 増加する N〔div〕が+V

N〔hum〕が+N〔abs〕を+V

N〔hum〕が+N〔con〕を+V

N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①この駅の利用者数は二年間で三倍近くにも増加した。(国・413)

566 そびえる N〔con〕が＋V

①折崖の松の下には、鶴の糞に染った白い岩角がそびえ……（三島由紀夫・潮騒）

②お城の天守が遥に森の中にそびえている。（二葉亭四迷・平凡）

567 染める N〔hum〕が＋N〔con〕を＋V

①この仕事に手を染めたのは今からちょうど十年前のことである。

②叢立ち急ぐ嵐雲は、炉に投げ入れられた紫のような光に燃えて、山懷ろの雪までも透明な藤色に染めてしまう。（有島武郎・生まれ出づる悩み）

570 そろえる N〔hum〕が＋N〔con〕を＋V

①新しいコーナーには、外国製のバックをはじめ商品が豊富にそろえられていた。（国・427）

②……少しもせいた気持などもなく、手鏡に髪をそろえる。（幸田文・流れる）

592 抱く N〔hum〕が＋N〔con〕を＋V

N〔hum〕が＋N〔hum〕を＋V

①彼女は赤ん坊を胸に抱いた。（ア・279）

②……片手に彼女の首を抱きながら、片手に彼女のほおをさすっていた。（芥川龍之介・歯車）

594 たくわえる N〔hum〕が＋N〔con〕を＋V

①ダムに蓄えられた水は発電や農地のかんがい、上水道などに利用する。（国・446）

②いつも眼の中に思想を蓄えてると云う様な顔付をしていた。（田村俊子・木乃伊の口紅）

607 たたむ N〔hum〕が＋N〔con〕を＋V

①今日の走人にも、ひとり胸に畳んだ悩みがある様子だった。（武田泰淳・森と湖のまつり）

②様々の蝶が、……花々に畳みながら、庭を横切った。(大岡昇平・武蔵野夫人)

608 だまる N [hum] が+V

①彼は親に黙って旅に出た。(フ・556)

②彼の暴言にはとても黙っていられなかった。(清・657)

629 頼る N [hum] が+N [hum] を+V

①全も勢力もないものが天下の士に恥じぬ事業を成すには筆の力に頼らねばならぬ。(夏目漱石・野分)

②わたしども夫婦は、老後を子供に頼るつもりはこれっぽちもありません。

662 つかれる N [ani] が+V

①あなたは自分の業績を上げなければならないというプレッジャーに疲れてしまうことがありますか。(昭和61年意識調査Q71)

②お繁の方はひどく旅に疲れた様子で、母の背中に頭をもせかけたまま、気ぬけしたような目付きをしていた。(島崎藤村・家)

663 尽きる N [hum] が+V

①彼女の性格は明朗の一語に尽きる。(国・504)

②その話は大概自分の夫と十四になるひとり息子に対する愚痴に尽きていた。
(推名麟三・深夜の酒宴)

667 継ぐ N [hum] が+N [abs] を+V

①三月の開通に間に合うよう、工事は夜を日に継いで進められた。(国・506)

②そんな木に竹を接いだようなことを言われても納得できない。(三・100)

668 尽くす N [hum] が+N [abs] を+V

①彼女はよく母に尽くした。(高・436)

②私はあの手紙の一行々々に猾智の限りを尽してみたのです。(太宰治・斜陽)

676 続く N [act] が+V

N [con] が + V

①子供が犬にかまれて死傷するという事件がこのところ各地に続いている。

(ア・335)

②六年生の後に続いて、小さな花を持ったかわいい一年生が入場してきました。
(国・54)

688 つぶる N [hum] が + N [con] を + V

①度重なるぼくの失敗にも、父は黙って目をつぶっていてくれました。(国・516)

②彼は悪いことはどんなことにも目をつぶらない。(講・722)

691 つまる N [con] が + V

①駒代は早速返事につまってしまった。(永井荷風・腕くらべ)

②煙突にすすがつまった。(講・723)

720 照らす N [hum] が + N [con] を + V

①あれはこう云う透明な秋の日に照らして見ないと引き立たないんだ。(夏目漱石・野分)

②これまで彼を弟のようにつくしんで来た心の歴史に照らして、今彼を恋と呼ばれるような気持の対象とすることはごの上なく醜くゐれた。(大岡昇平・武蔵野夫人)

展開する N [hum] が + N [abs] を + V

①車窓には、次々に新しい景色が展開するので、あきることがありません。
(国・543)

②びょうびょうたる大海が目前に展開した。(プ・1176)

737 通す N [hum] が + N [con] を + V

①老眼のおばあさんにとって、針に系を通すのはとても大変な仕事のように
す。(国・533)

②この原稿にざっと目を通していただけませんか。(講・782)

740 溶かす N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①食塩を水に溶かして、ビーカーの中に入れた。(国・554)

②彼は砂糖を水に溶かした。(ア・364)

741 解く N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①わななく手に紐を解いて、袋からだした仏像を枕もとにすえた。(森鷗外・
山椒大夫)

742 溶ける N〔con〕が+V

①コーヒーカップの底に、砂糖が溶けないで残っている。(国・560)

②塩は水によく溶ける。(講・793)

770 直す N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①漢文を現代文に直す問題が出た。(講・823)

②一万円をドルに直すといくらになりますか。(講・823)

775 泣く N〔hum〕が+V

①……ともに恋に泣き、世に泣き、運命に泣いた彼は……(田山花袋・妻)

②頂上を目前にして帰ってきたんだが、まったく悪天気には泣かされたよ。
(国・587)

798 にぎる N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①サーカスの綱渡りや空中ブランコはいつ見ても手に汗を握るスリルがある。
(国・603)

②戦場で相見える日があれば、掌中に此の人たちの生死を握って、その指揮
をとらねばならぬのだ。(阿川弘之・雲の墓標)

804 にじむ N〔con〕+V

①私の額には汗がにじんだ。(遠藤周作・海と青葉)

②男の子が泣きながら起き上がると、そのひざには血が赤くにじんでいた。
(国・605)

823 濡れる N〔con〕が+V

①並木道を雨に濡れながら歩いていった。(竹山道雄・ダハウのガス室)

②……よこしぶきの雨にびしょぬれに濡れながらも、若い細君のことを考えなければ歩いた。(田山花袋・妻)

824 ねがう N〔hum〕が+N〔act〕を+V

①困ったときの神だのみと言われそうだが、兄さんの高校合格を神に願った。
(国・613)

②田中さんを電話にお願いします。(プ1332)

827 眠る N〔ani〕が+V

①私の両親は故郷の小さな墓地に眠っています。(フ・710)

②多数の兵士が海底に眠っている。(プ・1341)

840 のばす +N〔abs〕+N〔con〕を+V

①植物はふつう地面の上に茎を伸ばし、地面の下に根を伸ばしていきます。
(国・626)

②きょうできることをあすにのばすな。(講・876)

841 のびる N〔con〕が+V

①挑戦者はチャンピオンの一撃でマットの上にのびてしまった。(国・626)

②そうして頤に伸びている、銀のような白い鬚……(芥川龍之介・枯野抄)

848 生える N〔con〕が+V

①芽をだすに都合よく暖めると、すぐ泥に黴が生えちやふし。(宮本百合子・伸子)

②庭に雑草が生えだした。(講・890)

849 映える N〔con〕が+V

①初夏の昼の光が代赭色の傾斜いっばいに流れて、……煙草は、濃い影を落とし、くすんだ艶々しさに映えて美しかった。(島木健作・生活の探究)

②汽車の窓から見た島々は、夕日に映えてとても美しかった。(国・633)

893 はやる N〔div〕が+V

①大統領を襲ったのは血気にはやる一部の青年将校たちであった。

②これをもって実行にはやる友人等を非難し、……。口（二葉亭四迷・平凡）

895 はらむ N〔hum〕が+N〔hum〕を+V

①船は順風を帆にはらません、ぐんぐんと海原を進んでいった。（国・655）

②空はオレンジ色を内にはらんだ涙ぐまい灰色をして、……。……（大江健三郎・飼育）

876 はる N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①水路に渡した木の上に氷が張っているところがあった。（庄野潤三・静物）

②竹藪に伏勢を張って居る村雀はあらたに軍議を開き初め、……。……（山田花袋・武蔵野）

937 広がる N〔abs〕が+V

①一つの想念が急に彼女の心に広がり出していたからだ。（堀辰雄・菜穂子）

②恰も明方の寒い光が次第に暗の中に広がるよう暗中不思議に朗かな心持ちである。（芥川龍之介・枯野抄）

938 広げる N〔hum〕が+N〔abs〕を+く

①机の上に阿部ミツの託した日章旗を広げた。（遠藤周作・海と毒薬）

②やがてとどけられたお弁当、お座敷に広げて御持参のウキスキイをお飲みになり、……。……（太宰治・斜陽）

939 広まる N〔abs〕が+V

①彼の英雄的な行為のうわさはたちまち国じゅうに広まった。（講・762）

②戦国大名が全国各地で強力な政治社会を群生させた結果、京都附近に偏在してきた文化が全国にひろまっていたことはすでにのべたとおりである。
（家永三郎・日本文化史）

940 ふえる N〔div〕が+V

①兵達は急いで四散し、新しい死者と傷者が道端に増えた。（大岡昇平・野火）

②石炭にかわって、石油の需要が何十倍にも増えた。(国・696)

968 振る N [hum] が+N [con] を+V

①頭を横に振って靴下を又はこうとした。(小島信夫・アメリカンスクール)

②順番がわからなくなならないように、用紙のすみに番号をふっておきなさい。

(国・714)

971 ふるえる N [con] が+V

①お母さまのお声は怒りに震えていた。(太宰治・斜陽)

②娘の顔のただなかに野山のともし火がともった時には、島村はなんともい
えぬ美しさに胸が震えたほどだった。(川端康成・雪国)

979 減る N [abs] が+V

N [div] が+V

①この十年間で、村の人口は当時の三分の二以下に減ってしまった。(国・
723)

990 吠える N [ani] が+V

①うちの犬が見らぬ人にほえている。(ア・486)

②嵐は樹に吠え、窓に鳴って惨じく荒れ狂うて居る。(倉田百三・愛と認識)

1012 待つ N [hum] が+N [hum] を+V

①彼らの活躍にまつところが大きい。(講・1072)

②私が成功するか否かは彼の努力にまつところが大きい。(講・1072)

1023 まわす N [hum] が+N [con] を+V

①回覧板は早目に次の家に回してください。(国・765)

②この品物はここでは不要なので、どこか欲しいところに回してください。

(国・765)

1024 まわる N [con] が+V

①おやじの背中に回って手術衣の紐を結んでやっていた。(遠藤周作・海と
毒薬)

②おとなしい説明役に回ろうとする H 氏の話を、……（武田泰・森と湖）

1060 燃える N〔con〕+V

①彼等の胸中には炎炎たる政治の理想が燃えていた。（獅子文六・てんやわんや）

②男は怒りに燃える目を上げて、盗賊の首領をにらみつけた。（国・823）

1078 焼く N〔hum〕が+N〔con〕を+V

①その肩も背もさんざん野良仕事に焼かれている近在からの湯治客……（田宮虎彦・銀心中）

②姉は海水浴に行って体じゅうを日に焼き、真っ黒になって帰ってきた。（国・840）

1081 焼ける N〔con〕が+V

①人並みに日に焼けた、その細い、痩せた手足……（宇野千代・おはん）

②引き裂けた白いカーテンの色が次第に陽に焼けていくのがハッキリわかったが。（遠藤周作・海と青薬）

1091 破れる N〔con〕が+V

①知子との恋愛に破れた後、南の島で結婚していた涼太が……（瀬戸内晴美・あふれるもの）

②人を恋して、その恋に破れるのも、貴重な経験ですよ。（国・846）

1107 ゆるす N〔hum〕が+N〔act〕を+V

①権利のないものに存在を許すのは実業家の御慈悲である。（夏目漱石・野分）

②私はあなたにもう一度体を許可するようなことがあれば……（円地文子・秋のめざめ）

1109 ゆれる N〔con〕が+V

①白い花がそよ風に揺れ、その周りをちょうが飛び回っている。（国・864）

②ただ夜になると、板びさしの下に真赤なれい提灯がともされ、遠くから見

ると、それが狐火のように海風に揺れていた。(石川達三・人間の壁)

1117 よごれる N [con] が+V

- ①子供たちは一日中遊び回り、夕方家に帰るところには、顔も手足も、背中までも泥に汚れている。(国・875)

1124 よみがえる N [ani] が+V

- ①記念碑が立てられ、村を守った男の名が再び人々の心によみがえってきた。(国・880)

- ②この書を読んでいくうちに、うち沈んでいたわたしの心に希望がよみがえってきた。(国・880)

1143 わかれる N [abs] が+V

- ①社会はいくつかの階層に分かれている。(プ・1886)

- ②また林に入った、中で道は二つに分かれていた。(大岡昇平・野火)

1152 割る N [hum] が+N [con] を+V

N [hum] が+N [nmn] を+N [nmn] で+V

- ①さして広くもない部屋をついたて様のもので二つに割り……(堀田善衛・広場の孤独)

- ②その夜、私はアルコールに水を割ってひとり痛飲した。(桒崎春生・桜島)

1154 割れる N [con] が+V

- ①世界が二つに割れてこうして戦争をしていても、……(阿川弘之・雲の墓標)

- ②緞子帷が二つに割れてすると肩べって背後で一つになっておうと、……(谷崎潤一郎・少年)

4. もう一つの必須成分の再発見

まず、吉田金彦(注11)のあげた例文を参照されたい。

○秋ももはや終わろうとしている。（高見順・如何なる星の下に）

○それ〔踏絵〕を、今私はこの足でもうとする。（遠藤周作・沈黙）

氏によれば、右の文は、「秋もはや終わろう」「私はこの足で踏もう」というように、外形上は一旦「う」で切れ、下接「とする」「としている」でさらに上文の引用あるいは一種の説明となっており、「う（よう）」「と」「する」三語それぞれの意味が組み合わさって、「よ（よう）とする」全体を一語の助動準に準じるものとして、動作・現象など実現しかかっている＜刹那の状態＞するわち＜将然態＞を表し、「う（よう）とする」の主語が非情物の前文の「う」は推量の意味に使われるのに対し、主語が有情物の後文の「う」は上接の意味意志動詞と相俟って、意志の意味に用いられるという。つまり、ここでの「する」は一種の不完全動詞で形式化して強調・陳述の作用をなしていると氏は付け加えた。Xバー理論の表記法を示せば、上述した二文は次のようになる。

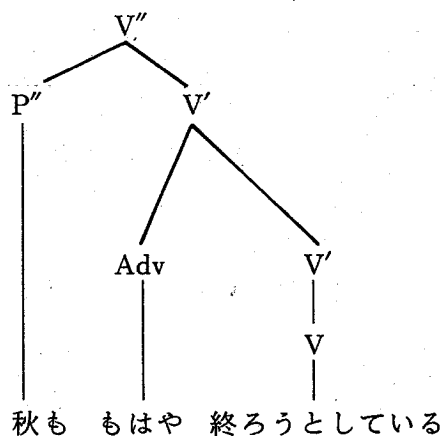


図 9

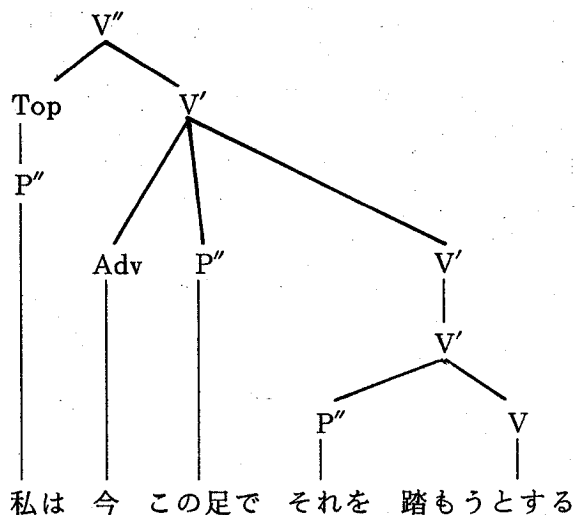


図 10

一方、意志を表す＜将然態＞たる「う（よう）する」は、例えば次の文のように、少々意味の違いこそあれ、すべて「う（よう）と思う」に置き換えられること

が分かれると氏は指摘した。

(1)米子かしぶしぶ床を敷いて、不二子を寝かせようとする。(幸田文・流れる)

(2)ゆるぎない決心のもとに、新たな研究にとりかかろうとしていた。(国・247)

(3)この一年間けど離れた即いたりして、何かいつも肉体的に心情的に不一致の点を残し、近づこうとしては、再び遠かっていた。(野間宏・暗い絵)

(4)夜更けてから窓の外のエを渡る風の音も、眠りに入ろうとする夢に交って、その時まで桃子を嘆息させた思いからはいくらか遠ざかせたようであった。

(島崎藤村・三人)

しかし、構文的に「うとする」と「と思う」との間にはかなりの差異が見られる。つまり、前者の「する」は一種の助動詞であるのに対し、後者の「思う」(注12)は正銘の動詞と認めなければならない。その証の一つに、次の例文に対する森重敏氏の示唆的見解があげられよう。

○「さてベースボールを聞いて来っと。」(小山祐士・瀬戸内海の子供たち)

○「ちゃ、これで靴下でも買はうっと……。」(岸田国士・沢氏の二人娘)

氏によれば、右のよう文末の「と」は終助詞化したもので、元来この文の上下に「私は……と思う」の形式があるべきものである。論理的には主語と述語との消去の形式であるという。

つまり、「私は……とする」の形式でなく、「私は……と思う」としている見解は、「思う」類の動詞の述語実現において、単なる「が」格と、もう一つの必須成分たる「第5形引用文」(筆者が仮に呼ぶもの)とが持たれること、そして「第5形引用文」と「思う」類の動詞とのつながりが「とする」よりもかなりルーズであること、この二つの点からいって、後述する証拠と相俟って非常に有益である。仮に図で示せば次の如くである。

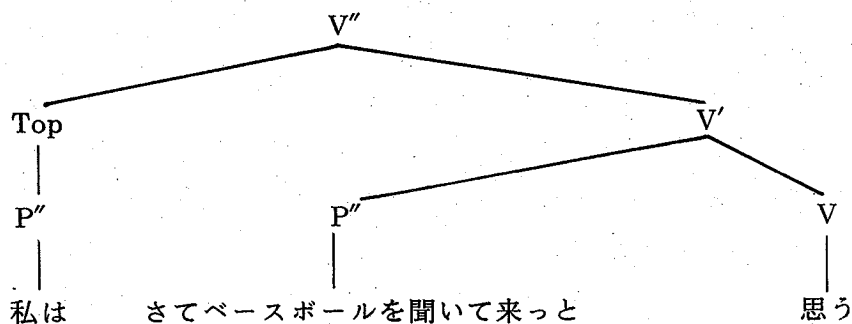


図11

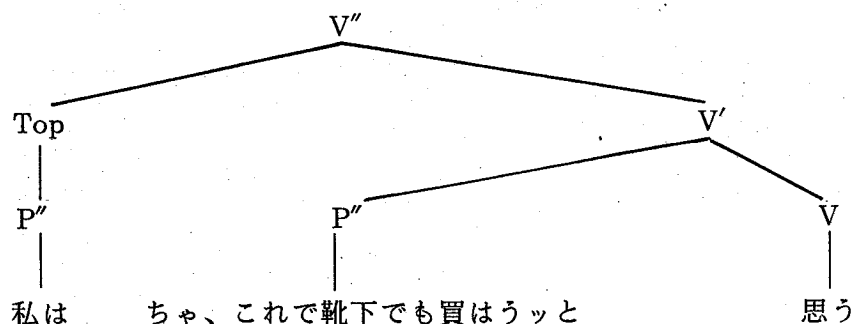


図12

証の二つに、「思う」と同じく、意志と決心を表す「思い立つ」「決心する」「企む」「誓う」「努力する」などの動詞はすべて「必須成分」か「随意成分」を挟むことによって、「う（よう）と」との緊密な関係をくずすことも可能である。次の例文を参されたい。

- (5) 結婚しようとどうして思い立つのか。(新和英 1299)
- (6) 妹娘は逃げようと色々考えていました。(黄鳳珠・しちやはちや)
- (7) 彼女は体の不自由な人のために一生をささげようと固く決心した。(フ・304)
- (8) 泣いている妹を笑わせようと、ぼくは一生懸命(注 13) だった。(国・905)
- (9) 彼らは王位をくつがえそうと共同で企んだ。(ア・297)
- (10) 何事にも協力していこうと固く誓った仲間に、みごとに裏切られた。(国・479)

①彼は再び繁子に近づくまい（注 14）と心に誓って居た。（島崎藤村・桜の実の熟する時）

②彼はそれを土曜日までに仕上げようと、できるだけ努力した。（プ・1257）

③討論の中心的地位を占めようと彼は努力している。（フ・62）

④わたしは彼を救おうといっしょうけんめいに努めた。（ア・336）

⑤文化祭を成功させようとあれこれ気を使い、（注 15）すっかり、神経をすり減らした。（国・386）

つまり、例えば「一人の娘が髪を結おうと思った（川端康成・髪）」のような構文は表記法で示せば、図 13 ではなく、図 14 の通りであり、言い換えれば「髪を結う」の「推量意向形」が「と」助詞と組み合わさった、筆者が呼ぶ「第 5 形引用文」（注 16）たる「髪を結おうと」は述語「思う」にとっての必須成分の一つと考えなければならない。

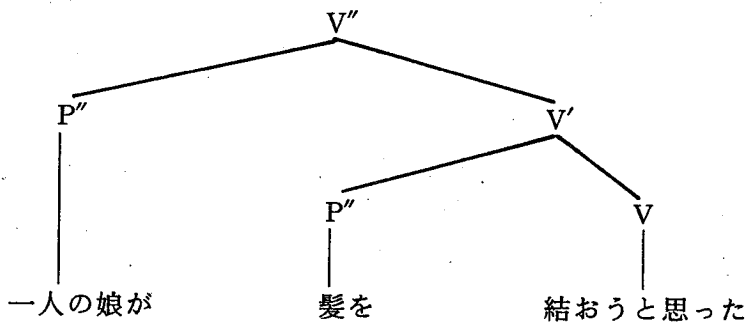


図 13

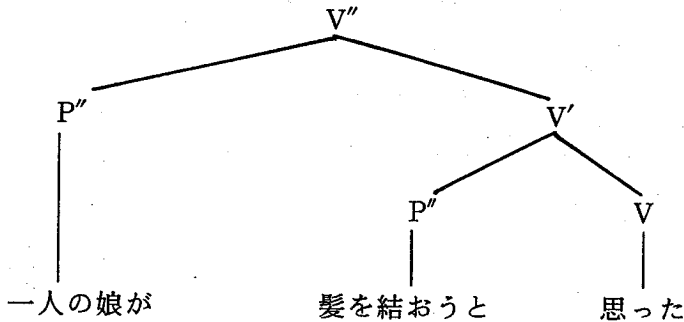


図 14

そして、この種必須成分たる「第5形引用文」は、意図活動（注17）としての判断作用のよってたつ対象だが、もう一步沈潜化して、思考や知識から抽出された知的対象に転ずれば、多くの場合、形式名詞「コト」でしめくられる文に置き換えられる。一寸、長たらしいが、上述した例文は次のように書き直される。

⑩ 結婚することをどうして思い立つのか。

⑪ 妹娘は逃げることを色々考えていました。

⑫ 彼女は体の不自由な人のために一生をささげることに固く決心した。

⑬ 泣ている妹を笑わせることに、ぼくは一生懸命だった。

⑭ 彼らは王位をくつがえすことを共同で企んだ。

⑮ 何事にも協力していくことを固く誓った仲間に、みごとに裏切られた。

⑯ 彼は再び繁子に近づかないことを心に誓って居た。

⑰ 彼はそれを土曜日までには上げることにできるだけ努力した。

⑱ 討論の中心的地位を占めることに彼は努めている。

⑲ わたしは彼を救うことにいっしょけんめに努力めた。

⑳ 一人の娘が髪を結うことを思った。（注18）

また、予想した通り、「コト文」は一步進んで、凝縮化した動作性の抽象名詞に発展し得ることが分かるし、また「第5形引用文」当然ながら、益岡氏のいわゆる「引用語」の持つ副詞的性格を持っており、「こう」「このように」「そう」「そのように」などの副詞的要素によって置き換えられることも可能である。前述した例文をいくつか示すと次の通りである。

㉒ 結婚のことをどうして思い立つのか。

㉓ どうしてそう思い立つのか。

㉔ 彼らは王位打倒を共同で企んだ。

㉕ 彼らは共同でこのように企んだ。

㉖ 協力を固く誓った仲間にみごとに裏切られた。

㉗ そう固く誓った仲間にみごとに裏切られた。

64 討論の中心的地位の獲得に彼は努力している。

65 彼はそう努力している。

66 わたしは彼の救出にいっしょうけんめいに努めた。

67 わたしはこのようにいっしょうけんめいに努めた。

68 一人の娘が髪結いを思った。

69 一人の娘がそう思った。

今までの論究を、最初の動詞「思い立つ」をもって図で整理すれば、一層はっきり見えるだろう。

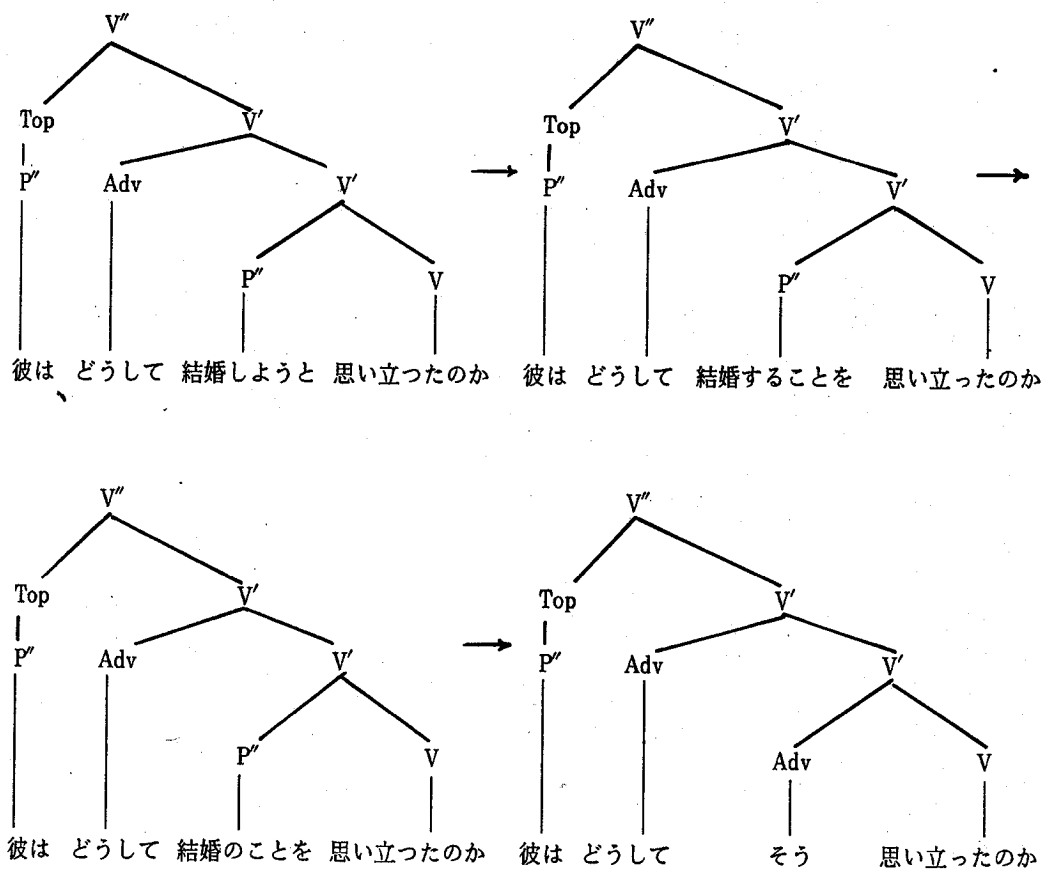


図 15

本節ではある種の動詞の実現において、もう一つの必須成分すなわち「ト」助詞

付きの「第5形引用文」が持たれることを指摘した。以下、こういった動詞は意味的にどんなまとまりのある類型を示すかを考察したいと思う。

5. 第5形引用文と意図動詞の組み合わせ

前節では今までの研究ではとかく看過されたもう一つの必須成分である「第5形引用文」の存在を考察してきた。当然ながら、この種の「第5形引用文」と組み合わせあった動詞は何かという問題提起が決して無駄でないことは自明の理である。これらの動詞は、よく観察すると、人間の意志活動というより、もっと下位分類化した意図活動を示す「意図動詞」と定義した方が適当であろう。なぜならば、こういった「意図動詞」の実現において、意図活動の動作たる人間と、動作性の抽象名詞あるいはその一步手前の〈刹那状態〉の「第5形引用文」を対象とするものが必ず持たれるからだ。くだけて言えば、意図動詞構文は誰かが意図的に何かをする行為を表す構文であり、しかも、ほとんど二つの必須成分（注19）を要するだけである。そして、この構文は、「誰ガ」は「ガ」格、「何ヲ」は「ヲ」、「ニ」、「ト」のいずれかの格を取る。かくて、対象たるものが多様な格を持ち得る事実には川端善明のいわゆる一種の格の連絡（注20）が見られる。

一方、このグループの動詞に入る目安は多くの場合、「ト」を取る「第5形引用文」の有無にかかわる。逆に言えば、「第5形引用文」を有する動詞は「意図動詞」と言ってもいい。例えば、上述した「思い立つ」「決心する」「誓う」「努力する」「努める」「思う」などの動詞と、次の例文に出る「焦る」（注21）「意図する」「考える」「企てる」「計画する」「決意する」「志す」「試みる」「誘う」「企む」「目指す」「もがく」「目論む」「心を配る」「迷う」「工夫する」「うかがう」「決める」「思い定める」などの動詞は意味的にこのグループの列をなす。参考のために前節で述べた動詞「思う」「決心する」「努力する」「努める」などの例文も多少加えておく。次の例文を参照されたい。

- 40 是が非にもこの間に駒代を説き伏せてしまおうと焦っている。（永井荷風・腕くらべ）
- 41 沼へでも落ちた人が足を抜こうと焦る度にぶくぶく沈む様に……（夏目漱石・吾輩は猫である）
- 42 彼は損を取り返そうと焦った。（新和英・44）
- 43 彼は新しい仕事を始めようと意図している。（ア・41）
- 44 私は何とか理由をつけて、この役目から放免されようと思った。（井上靖・晩夏）
- 45 畢竟倦まないというのは、勝とう勝とうと思う励みのあることを言うのである。
ろう。（森鷗外・青年）
- 46 これから定子に会いに行つてよそながら別れを惜もうと思っていた其の心組みさえ物憂かった。（有島武郎・或る女）
- 47 義母との関係を、義母を相手に二人だけで結末を付けようと考えているから、
手が付かないのだ。（円羽文雄・菩提樹）
- 48 私が進まうかと止さうかと考えて、兎も角も翌日迄待たうと決心したのは土曜日の晩でした。（夏目漱石・ころろ）
- 49 ブルツエフの提訴も、……テロリスト全部を傷付けようと企てたものように感じられるから、……（大仏次郎・地霊）
- 50 彼らはいかだで大平洋を横断しようと計画した。（ア・50）
- 51 この秋に、クラス会でもやろうかと計画しているところです。（国・239）
- 52 彼らは自分たちだけでそれをしようと決意した。（新和英・806）
- 53 これからの半年間、死にものぐるいで勉強しようと決意した。（会・301）
- 54 自分でそうしようと決心した以上は、最後までやり通したい。（国・247）
- 55 人間の達した最高の境を継ごうと志すときに陥いるわれわれの幻想……（亀井勝一郎・信仰の無償性）
- 56 世間は必ず、此附属物に雷同して他の人格を蹂躪せんと試みる。（夏目漱石・

野分)

67)そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を回復しようと試みた。(芥川龍之介・鼻)

68) (126) が妥当なのは (中略) 聞き手が、しつこく買い物に行こうと誘っているような場合である。(『言語』・一九八四年一月号 P・256)

69)彼はあなたを陥れようと企んだのた。(謂・635)

60)ある昂揚した刹那には、人は悦んで己を棄こようと誓うだろう。(亀井勝一郎・信仰の無償性)

61)彼女は美しくなろうと努力した。(ア・378)

62)最初ちょっと見ただけでは、この提案は全般的な和解を成立させよう目指していることもあって打算を超えた建設的なものに見える。(大賀正喜・現代フランス語名詞活用辞典)

63)来た道引き返そうともがくことはたしかな死につながることをいちはやく悟ったは、その場で雪あらしが止むのを待つことに決めた。(大賀正喜・現代フランス語名詞活用語辞典)

64)巢から落ちたひなは起き上がろうともがいて羽をばたつかせている。(国・823)

65)笑わせようと目論で掛ると、怒ったり、丸で反対だ。(夏目漱石・三四郎)

66)家つき娘であった豊乃は、孫娘の嫁入りを自分の分も重ねて盛大なものにしようと目論んでいたのである。(有吉佐和子・紀ノ川)

67)彼女は妻としての務めを果たそうと努めた。(ア・1126)

68)みんなの手前、泣くまいと努めたが、あふれる涙をどうすることもできなかった。(国・513)

69)この著は常に客観的であろうと心を配っている(ロ・1759)

70)鼻の先へよせに皺と眼尻にたたえた筋肉のたるみとが、笑ってしまおうか、しまうまいかと迷っているらしい。

㉑ そして、逆におもしろい略称を作ろうと工夫しているうちに、その新しい提案なり政策なりの、全体の構成や考え方が、うまくまとまってくるということもあるらしい。（日向茂男・発表する技術）

㉒ 目当てのものを手に入れようとうかがう（学研・1511）

㉓ この客に保険をかけさせようと決めても相手のことわり文句に同調していたら、保険加入の目的は達成されない。（三鬼陽之助・サラリーマンタブー集）

㉔ あれも言おうこれも言おうと欲張りすぎて、話にや拾がつかなくなり、聞き手は、この人何を言いたいのかと、首をかしげることになってしまう。
（日向茂男・発表する技術）

㉕ 正面から切り出して女の心持をきこうと思い定めたのである。（永井荷風・ひかげの花）

㉖ 一切を打ち明けてしまおうと、観念のほぞを固め矢先、……（安部公房・他人の顔）

㉗ 其時候は生涯此事に一身を委ねようと大決心をした。（齋・422）

㉘ 彼女は しゅうとめを喜ばせようと一生懸命だった。（ブ・114）

今まで述べた「第5形引用文」はもっぱら肯定的意志という意味に使われてきたが、実際の動詞「努める」の例文㉗と「述文」の例文㉘を見ると、否定的意味に用いられる助動詞「まい」によって置き換えられることが分かるし、動詞「考える」の例文㉙では、「進もう」「止さう」という相反対する意味のペアが使用されていることから、当然ながら助動詞「まい」の使用可能が予想される。もう一度、吉田氏のあげた例文を参照されたい。

○ 少なくとも、今やっている研究が完成するまでは、一切の人間的愛情に弱れまいと心に決していた。（舟橋聖一・木石）

○ もう飲むまいと決心したくなるけど、失敗をやったと、後悔してゐたのである。（武田麟太郎・銀座八丁）

○ 健三はそれで、出来る丈不快の顔を二人に見せまいと力めた。（夏目漱石・

道草)

○私はこの喜びを誰にも気どられまいと自分に誓った。(石坂洋次郎・若い人)

○いざ三沢の出院となれば、其位な手数は厭ふまいと、昨日既に覚悟を決めた所であった。(夏目漱石・行人)

○地画家が見た恭吾の動かない姿勢と強い物の見詰めようは、この男を対象にして、目を離すまいと固く決意したものであった。(大仏次郎・帰郷)

○「先日きりで会はん方がお互いのためにいいと思って、今日は来まいかと思っただが、意志が弱くてとうお伴をするやうに……」(正宗白鳥・微光)

これらの例文における動詞は、当然ながら、筆者のいわんとする「意図動詞」のグループでなければならぬことは言うまでもない。そして、こういった「第5形引用文」と「意図動詞」はもう一步進んで、「という」の形によってお互いにしめくり合う、寺村氏のいわゆる「外の関係」たる連体修飾構文、つまり、一種の「意図名詞」(注22)までに発展し得ることは次の例文を見ても納得できよう。

79建設的質問でなく、発表者を図らせようと、発展の内容を陳腐なものにしてしまおうという意図を持った質問には、こちらがあわてたり、真正面からぶっかったりしたのでは、かえって逆効果だ(日向茂男・発展する技術)

80そして、こう答えることで、「この人はなんて頭の中が整理されている人だろう」と、視聴者の関心を引きつけようという狙いなのだ。(同右)ときには、その発展を混乱させようという下心を持って、意地の悪い質問をしてくる人も中にはいる(同右)

81廊下を走って持参することで、そんなにまで熱心に書類を作成したあと、上役のおぼえをめでたくしようという浅ましい根性なら、許せない。(三鬼陽之助・サラリーマンタブ集)

82その最前線から、恋人に電話をしようなどという料簡を起こすのはよっぽど現状認識があまいのである。(同右)

84彼は政治家になろうという欲望に燃えていた。(国・873)

85 ユダは、イエスを役人の手に渡そうという陰謀をたくらんでいた。

86 江分利の、金網を2倍にしようというアイデアには別の狙いがあった。(山口瞳・江分利満氏の優雅な生活)

87 あたりまえのことだが南フランスがヴァカンス旅行に人気があるのに反して、誰もこの国を見物しに行こうなどという気は起こさない。(大賀正喜・現代フランス語名詞活用辞典)

また、偶然の一致とは思わないが、寺村氏のあげたこういった「意図名詞」の例文をも参照されたい。

○ただ受けよう、ただ笑わせようという考えが芸を浅いものになっている。(新聞)

○私はその時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の心の中から、ある生きたものを捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って、温かく流れる血潮を吸ろうとしたからです。(夏目漱石・心)

○中日はその後もたびたび悪球に手を出し、得機点を逃がした。連敗を免れようというあせりがこんな結果を生むのだろう。(新聞)

つまり、氏のあげた三例の名詞「考え」「決心」「あせり」という「意図名詞」は、筆者が前述した「意図動詞」に含まれる「考える」「決心する」「焦る」三語と全く対応している。

本節でのしめくくりとして、「意図動詞」の名称を一層浮き彫りにするように、動詞「意図する」を使う筆者の恣意的な例文を通して、今まで述べてきたところを図で示せば次のようである。

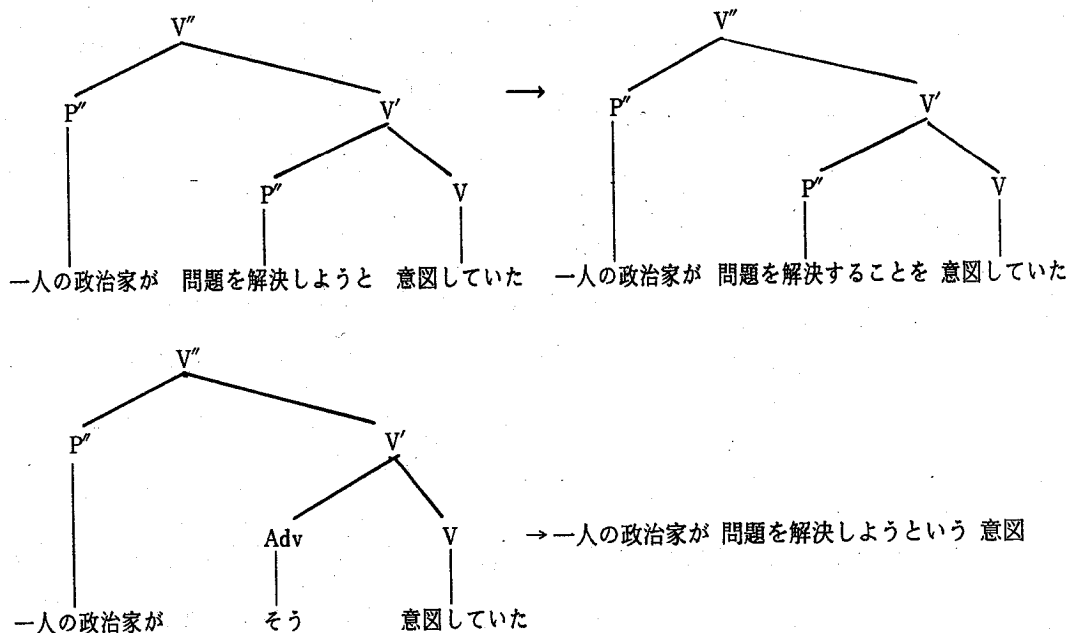


図 16

6. 結 語

以上、本稿では石綿敏雄・荻野孝野両氏の日本語用言結合価の動詞に必要な格を指摘し、今までの研究ではとかく看過されてしまったもう一つの必須成分「第5形引用文」と、意図動詞との緊密な結び付き関係を（注23）明らかにした。

注

注1 Tesniere L. (1959) Elements de syntaxe structurale. Paris, Klincksieck P・672 [2ed. rev et cour: 1965] と Arrivé M. (1969) Les Elements de syntaxe Structurale de L. Tesniere. Lang-frn PP 36-40

注2 つまり述語の実現に必要な名詞の意味特徴の記述は「動作主」「相手」「対象」などと、抽象度が低いものの代わりに、もっと具体的にたとえば「動作主」の下位分類としての「人間」「動物」「具象物」「固体」「機械」などに重点を置いてなされる。もちろん、学者によってその分類法はかなり違う。

注3 この表は、日本語の基本語彙の列に加わる用言をほぼカバーしているが、オ

ノマトペの記述を欠くのが玉に瑕と言えよう。

注4 宮島達夫（一九八六）「格支配の量的側面」宮地裕篇『論集日本語研究現代篇』P.42。氏は動詞との基起関係のつよいものを「異型成分」、よわいものを「例外成分」とよび、純粹に量的なちがいを、捕えようとする所に意味があるとしている。

注5 チョムスキーのGB理論の一つであるXバー理論を参照されたい。

注6 仁田氏の依存関係図では「撃ッタ」にかかわる「狩人ガ」と「雁ヲ」とどちらが親和度が高いかを示し得ないし、修飾語たる「飛ンデイル」「ユックリ」二語も直線的でないことがわった。

注7 もちろん「引用文」の記述を欠くのが難点と言えよう。実際、多種多様の意味に使われている「思う」一語を徹底的に分析すれば、結合価文法問題点の多くを解決できると思われる。ここで「S」は引用文、「S'」は引用句（述語だけ一つを指す）、「S''」は第5形引用文（後述するように「う（よう）」と＋意図動詞）、「N」は必須成分、「N'」は必須成分に類するもの、例えば、時には副詞「こう」「そう」の類、をそれぞれ示す。名詞の意味特徴を暫く看過して、格だけに注目すれば、動詞「思う」の構文にはおよそI「NがSと思う」、II「NがS''と思う」と二つのタイプがある。

○僕はそうは思わない。（新和英・1303）

そして、この例文「僕はそうとは思わない」は、実際I「NがSと思う」とII「NがS''と思う」とに両方とも掛かっている。

注8 益岡氏のいわゆる「引用語」は広義的に筆者の引用語「Nと」と引用句「S'」を包み統べる。

注9 実際、動詞「考える」の構文は「思う」とほぼ同じものと考えられる。もちろん両者の間に幾分の相違が見られる。長嶋善郎（一九七九）と森田良行（一九七九）を参照されたい。

注10 倉持保男（一九八六）「日本語教育における類義語の指導」『日本語学』5

巻9号。氏の「に」に対する見解は当を得ていると思う。

注11 吉田金彦（一九七一）『現代語助動詞の史的研究』明治書院。

注12 動詞「思う」がさまざまな意味に取れることはすでに上述した通りだが、ここでは、特に意志と決心を表す。

注13 「一生懸命だ」は形容動詞だが、動詞「思う」と同じく、「第5形引用文」を取り得る。

注14 後述するように、否定的な「第5形引用文」を上接させることも可能である。

注15 「気を使う」全体は一語と見なし、「第5形引用文」と結び付き得る。宮地裕（一九八二）では、これは、相手のために、事がうまく（不快感を与えない）ように、細かい所まで配慮するのが本義であるとしていることから「意図動詞」のグループに加わると考えられる。なお、氏のもう一つの挙例を参照されたい。

○一語も無駄を言うまいと気を配っているような説明の仕方だが……。

（『いのちの初夜』北条民雄一九三六年『学研』）

こういった慣用句は実際の記述分析においてもどうしても必要だと思って、さらに二例を加えよう。

①答えを出そうと頭をひねた。（講・35）

②再び同じ過ちをすまいとほぞを固めていた。（プ・1614）

注16 ここで「第5形引用文」と呼ぶが、多少の誤弊があるかもしれない。本来ならば伝統文法に則って「未然形引用文」とすべきだったが、「う（よう）」のほかに「ない」「せる（させる）」「れる（られる）」との意味も取れるし、寺村氏の「未然」「已然」と、山下秀雄（一九八六）の「未然」「已然」などの用語と混同しやすいから、いっそ寺村氏の「推量意向形」を借用してもいいが、本稿での「意図」の意味を充分に発揮していないので、あえて、従来、筆者が主張している動詞活用表の第5形という用語を使うことにした。この動詞活用表の内容に詳しく立ち入る余裕はないけれども、おおざっぱに

動詞活用表

第Ⅰ類	V1	a	か	さ	た	な	ま	ら	わ	が	ば	ない、れる、せる
	V2	i	き	し	ち	に	み	り	い	ぎ	び	ます、たい、ながら
	V3	u	く	す	つ	ぬ	む	る	う	ぐ	ぶ	・
	V4	e	け	せ	て	ね	め	れ	え	げ	べ	ば、る
	V5	o	こ	そ	と	の	も	ろ	お	ご	ぼ	う
	V6	i	い	し	っ	[ん]	[ん]	っ	[い]	[ん]		て[で]、た[だ]
第Ⅱ類	V1	$\frac{i}{e}$										ない、られる、させる、ろ
	V2	$\frac{i}{e}$										ます、たい、ながら
	V3	$\frac{i}{e}$	る									・
	V4	$\frac{i}{e}$										れば
	V5	$\frac{i}{e}$										よう
	V6	$\frac{i}{e}$										て、た
第Ⅲ類	V1	こ										ない、られる、させる、い
	V2	き										ます、たい、ながら
	V3	くる										・
	V4	く										れば
	V5	こ										よう
	V6	き										て、た
	V1	し、[さ]										ない、[れる]、[せる]、ろ
	V2	し										ます、たい、ながら
	V3	する										・
	V4	す										れば
	V5	し										よう
	V6	し										て、た

言えば、これは、寺村の表を、五段動詞のアイオ順を中心とした活用形式に合わせたものである。第6形の $\ddot{\text{I}}$ は、I類動詞の第6形に「テ」「タ」などが付く時に起こった音便を示す。

つまり、本稿ではこの表に沿って、動詞「思う」を上接させるものをV5「第5形引用文」と名付け、「S”」という符号をつけることにした。

注17 ここでの「意図活動」は、人間あるいは有情物が意図的に何かしようという心的発露を表す。従って推量の意味が取れる「う（よう）」「まい」はこの「意図活動」に加わらない。ただし、あることをしようかどうか、判断に述べる場合は一種の心的発露と認めてもいいから、前述する例文(47)のように「う（よう）か」「まいか」の使用も可能である。次の吉田氏の挙例を先に参照されたい。

○「私はまた官員の口でも探そうかと思います。」（二葉亭四迷・浮雲）

○披かずに置こうかと思案したが、それではやっぱり心残りである。（鈴木三重吉・山彦）

○彼はもっとここに居て見ようか、それとも出て行ってしまおうかと暫く躊躇していた。（堀辰雄・ルウベンスの偽画）

注18 例文(47)と前述の(48)のように「コト文」と「名詞化」が使えない理由は、構文論によるものではなく、「髪を結うこと」と「思う」との組み合わせによる意味論的制限にあると考えられる。注7を参照。

注19 意図動詞の実現において動作は一種の再帰名詞の機能のような役割を果たすものだが、動詞「誓う」の場合は、例えば、「私は同じ誤りを繰り返すまいと心に誓った（講・637）」の「心に」を「自分の心に」と見なす。もちろん、これは寺村氏のいわゆる「準必須補語」に相当するものと考えられる。

注20 川端善明（一九八六）「格と格助詞とその組織」宮地裕編『論集日本語研究（一）現代篇』明治書院。川端氏に限らず、森田良行（一九八五）もこの点に言及している。実際このような例はかなり見られるようだ。例えば、ほとんど

の辞書では「黙る」は自動詞と書いてある。一寸調べると、また「彼はそのことを黙っていた（ア・307）」し、「泣く」にしても、「ニ」格の記述欠如が目立つ。ネイティブスピーカーはともかく外国人学習者がとまどうのは必至だ。よく引用されている例だが、韓国語では、「電車を乗る」とするが、日本語にあっては「電車に乗る」になる。こうした意味で、ある動詞の実現において必須成分たる名詞の意味特徴の記述は無理だとしても、せめてその「格」の情報をどんどん入れた方がいい。国際交流基金の『基礎日本語学習辞典』は基本語彙の選定がすぐれるし、例文も生きているので、いい評判を得るのも当然だけれども、いくつかの述語、例えば「思う」「考える」「換わる」「甘い」などの「格」記述には、利用する側に立った配慮の跡があまりうかがわれない。この意味では、教育社の『国語基本用例辞典』、学研の『国語大辞典』のような辞書は特に外国人日本語研究者にとって、貴重な資料源と言っても言い過ぎではない。もちろん、国立国語研究所の計画中の『現代語用例辞典』ないし研究社の『英語基本動詞辞典』に相当する日本語の「格辞典」類の出現を期待してやまない。

注21 辞書では「ためらう」は自他動詞、「焦る」「もがく」は自動詞として扱われるのが普通だが、「第5形引用文」との直接的結び付きの外に、「第5形引用文」さらに助動詞たる「する」にも上接し得るから、その他の「意図動詞」と比べて、性質をやせ異にするだろう。なお「ためらう」は「ヲ」格を取り得るので、「もがく」より意味的に「意図動詞」に近寄っている。なぜならば、上述した通り、「意図動詞」類の動詞の実現において必須成分が二つ持たれるからだ。次の例文を参照されたい。

①「いっしょにいかないか。」の誘いに、わたしは返事をためらった。

（国・468）

②いきさつがすっかり分るまでは彼の味方につくことをためらった。（講・

659）

③彼は広間に入ろうとしてちょっとためらった。(プ・1044)

④彼は成功を焦り過ぎた。(会・20)

⑤われわれは損害を取り戻そうとして焦る。(ア・9)

⑥幼児は母親の手を離れようとしてもがいた。(ア・535)

⑦彼は目的を達しようとして跪いて居る。(齋・599)

なお「う(よう)とする」の代わりに、例えば、「木原は……解説風な著述をこの一夏の間にとめてしまいたいと、あせっているが(円地文子・秋のめざめ)」「その若者はすぐ出発したくて焦っているようだった。(講・32)」のように、「たい」を使うという事実は一種の連絡対象と言えよう。ただ「もう帰ろうと女を促すが早いのか、温泉の町の方へ引き返した(夏目漱石・坊ちゃん)」「よく旅行に出かけるときになると、なんでも持っていこうと、重そうな荷物を引きずって歩いている人がある(日向茂男・発表する技術)」の例文などは意図動詞構文に加わらないとしているが、「彼は父に早く行こうと促した(ア・54)」の如きは、「ニ格」を取る点では、動詞「誓う」と同じなので、問題提起の一つとしたい。

注22 寺村秀夫(一九七七)「連体修飾のシンタクス」と意味―その一―『日本語・日本文化 NO 6』。氏は次のように言う。「思考・思念の内容は、大いに、意志・意向の場合と推測・推量・断定の場合がまず多い。形式的には命令形(陳述度3度)、意向・推量(2度)で表わされることが多く、これらの場合には「という」が要求される」。これを受けて、「『思イ』『考エ』『気』などになると、その内容のところに強い陳述の勢いを盛り込むか、その中のところには単に『コト』だけを表わさせて、陳述の勢いや色合いは、それらにつづく部分で表わすか、によって『トイウ』が現れたり現われなかったりする」と氏はその後続いて見解を披露した。これは、はからずも筆者のいわんとするところとほぼ一致している。

注23 実際「意図動詞」は本来の意味からして当然ながら、時には「所期の表現」

(注24) ないし「目的表現」を上接させることを可能である。ここにも一種の連絡現象が見られる。もちろん個々たる動詞の語彙的性格に負う所が大いににあるにしても、こういった現象を無視してはいけないと思われる。例えば、動詞「努力する」「努める」の連絡現象は次の例文からはっきりわかる。

①自分の欠点を直すように努力しなさい。(フ・62)

②彼は名声を得んがために努力した。(講・814)

③武田校長はそう言っマ、つまずきがちな会議の進行に油をさすようにつとめた。(長与善郎・青銅の基督)

④二度とこんな間違いを繰り返さないように努めます。(プ・1126)

⑤彼は理想を実現するために努めた。(ア・336)

注24 佐治圭三(一九八四)では、「ように」は「目的表現」と言うよりもは、「所期の表現」とでも言った方がいいとしている(「類義表現分析の一方法—目的を表す言い方を例として—」『全田一春彦博士古稀紀念論文集2』三省堂)。

参考文献

- 1 松村明編(一九六九)『助詞助動詞詳説』学灯社。
- 2 寺村秀夫(一九八二・一九八四)『日本語のシンタクスと意味第Ⅰ巻・第Ⅱ巻』くろしお出版社。
- 3 森田良行(一九七七)『基礎日本語—意味と使い方』角川書店。
- 4 森山卓郎(一九八八)『日本語動詞述語文の研究』明治書院。
- 5 北原保雄(一九八一)『日本助動詞の研究』大修館。
- 6 長嶋善郎(一九七九)「オモウ・カンガエル」『ことばと意味2 辞書に書いていないこと』平凡社。
- 7 安達隆一(一九八七)『構文論的文章論』和泉社、P・333。

- 8 塚本勲（一九八三）『朝鮮語入門』岩波書店。
- 9 宮地裕編（一九八二）『慣用句の意味と用法』明治書院。
- 10 森田良行（一九八五）『誤用文の分析と研究—日本語学への提言—』明治書院。
- 11 仁田義雄（一九八〇）『語彙論的統語論』明治書院。
- 12 水谷静夫教授還暦記念会編（一九八七）『計量国語学と日本語処理—理論と応用—』秋山書店。
- 13 川端善明（一九八六）「格と格助詞とその組織」宮地裕篇『論集日本語研究（一）現代篇』明治書院。
- 14 宮島達夫（一九八六）「格支配の量的側面」宮地裕篇『論集日本語研究（一）現代篇』明治書院。
- 15 石綿敏雄（一九八三）「結合価から見た日本文法」『朝倉日本語新講座 3 文法と意味 I』朝倉書店。
- 16 石綿敏雄（一九八三）「内容・表現のモデルによる対照研究」『日・仏語の対象言語的研究』国研研究報告代表者川本茂雄）。
- 17 金田一春彦・池田弥三郎（一九七八）『国語大辞典』、略号『学研』。
- 18 言語学研究会編（一九八三）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房。
- 19 増田綱秀三郎（一九八三）『齋藤和英大辞典普及版』名著普及会、略号『齋』。
- 20 宮島達夫（一九七三）『動詞の意味用法の記述的研究』秀英出版、略号『動』。
- 21 林央典・金子博・岡昭夫（一九八六）『国語基本用例辞典』教育社、略号『国』。
- 22 山村三郎編『高校基本英作文辞典』旺文社、略号『高』。
- 23 岩田一男編『アンカー英作文辞典』学習研究社、略号『ア』。
- 24 島田昌治・林田遼右・ティエリ・トルード編（一九八五）『会話作文フランス語表現辞典』朝日出版社、略号『フ』。
- 25 近藤いね子・高野フミ編『小学館プログレッシブ和英中辞典』小学館、略号『プ』。
- 26 国際交流基金（一九八六）『基礎日本語学習辞典（英語版）』凡人社、略号『基』。

- 27 田村毅共編（一九八五）『ロワイヤル仏和中辞典』旺文社、略号『ロ』。
- 28 倉持保男・阪田雪子編（一九八五）『慣用句辞典』三省堂、略号『三』。
- 29 清水護・成田成寿編（一九七六）『和英辞典』講談社、略号『講』。
- 30 益岡隆志（一九八四）「叙述性補足語と認識動詞構文」『日本語学』7月号。
- 31 倉持保男（一九八六）「日本語教育における類義語の指導」『日本語学』9月号。
- 32 飛田良文（一九八三）「『日本大語誌』の考え方」『日本語学』6月号。
- 33 藤田保幸（一九八七）「「疑う」ということ—「引用」の視点から—」『日本語学』11月号。
- 34 中村捷・金子義明・菊池朗著（一九八九）『生成文法の基礎』研究出版社。
- 35 湯延池（一九八九）『漢語詞法句法續集』台灣學生書局。
- 36 趙順文（一九九〇）「マトリックス法による動詞の分類と活用」『せせらぎ』10期、東呉大學日文系。

付記：本稿は結合価文法の必須成分を考察するものだが、校正の段階において、あえてXバー理論を導入したのはひとえに湯延池先生の学恩によるものと断っておきます。